

近代イングランドの公開処刑における 教育的効果の一断面

教育学コース 入谷 亜希子

An Aspect of Educational Effects at Public Execution in Modern England

Akiko IRITANI

This paper tries to demonstrate how and why the working class got high literacy before the formation of public educational system, and also to clarify the significant meaning of execution as an educational place.

For example, chapbooks or reading matters which educated people and raised their literacy came not from school but from the place of execution that played a role of amusement. This explains how reading matters had helped the working class to get reading ability before 1870 (Elementary Education Act).

目次

1. はじめに一問題意識
2. 公開処刑の変遷と娯楽の変化
 - A. 公開処刑の質的変遷
 - B. 娯楽の場の変化と分化
3. 労働者階級の読み物が有する教育的効果
 - A. 公開処刑時のブロードサイド
 - B. チャップブックの浸透
 - C. 犯罪ニュースとニューゲイト・ノヴェルの浸透
 - D. 分冊本の出現とコーヒーハウス
 - E. 労働者階級の識字率と教育
4. おわりに一結論

1. はじめに一問題意識

イングランドでは19世紀後半まで公開で処刑を行ってきた。ラインボーや村上¹⁾らのこれまでの研究で、公開処刑の性質は時代ごとに変化してきたとされ、特にフーコーは18世紀のそれを「見せしめ効果」と「儀礼的性格」の2つをあわせもつものとしている²⁾。筆者はこの国家的見地からとも言える定義づけを不十分と考え、見物客側からの視点で公開処刑の持つ性質を今一度見つけ直し、新たな定義づけをしたいと考える。

具体的には、特に18世紀の公開処刑場は見物客にとって国家の思惑とは別に「娯楽の場」であったと言えるが、しかし単なる娯楽にとどまらず、ある種の教育的効果

があったのではないか、というのが筆者の見解である。その重要な役割を果たしたと考えられるのが活版印刷の発明以降、処刑場で配られるようになったブロードサイドである。当初は口コミで広がっていた犯罪者に関する情報は、このブロードサイドによって「読む」文字情報として広がるようになった。処刑場の見物客は貴賤老若男女問わないものだったが、特にここでは労働者階級がこうした文字媒体に接していたであろうことに着目したい。

イギリスにおける初の公教育制度の成立は、労働者階級に基礎教育を保障するものとして一定の評価がなされている。そしてその導入の目的をめぐっては、識字率の向上・道徳教化・犯罪予防など様々な解釈がある。しかし公教育制度成立以前に宗教団体や慈善団体、私立の学校教育機関が既に存立していたこと、さらには労働者階級の識字率も既に高かったことが明らかになっている。例えば大田によれば、1870年当時ほとんどの労働者階級の子どもが少なくとも学校に在学したことがあるか、在学している状態にあったとみるほうが適切であるという³⁾。またスティーブンスは今までの識字率研究が出生・死亡・結婚登記書のサインに依拠したものが多く、決してそれが「書く能力」を示すものにはならないことを指摘した上で、教育に対する親の態度や学校就学率などから識字率の高さ(読み書きできない者は平均2割前後であることを)を証明している⁴⁾。これらの研究は基礎教育法の従来の意義を捉え

直すものとして重要であるが、基本的に既存の学校教育のみが労働者階級の識字率向上に貢献しているとの前提に立っている点で不十分である。何故なら就学率から判断する識字率は結婚登記書のサインによる判断と本質的には変わらず、労働者階級の人々が実際に何を文字媒体として利用し何故識字率が高かったと言えるのかということに具体的には答えていないからである。一方でミッチは学校教育制度が必ずしも識字率を向上させたわけではないことを指摘し、代わりに新聞や書物といった識字環境の変化に着目している⁵⁾。しかし19世紀に限られているため、そもそもどのような経緯で識字環境の変化が起こりえたのかについては答えていない。

本稿では以上のような問題意識の下に、労働者階級が既存の学校教育制度に取り込まれる以前から実践の場として文字媒体に触れる場が既にあったこと、また彼らが日常生活の中でどのような文字媒体に触れ、何故高い識字率を維持したのかを明らかにすることを目的とする。具体的に、「実践的に文字媒体に触れる場」とは公開処刑場のことであり、まずは12世紀末に始まり、19世紀後半に非公開になるまで続いた公開処刑の性質の変遷をみた上で、特に18世紀末から19世紀にかけてのいわゆる近代化の時期における公開処刑の変革のありよう、例えば公開処刑の規模縮小化などに着目し、これをきっかけに人々と処刑との関わりがどのように変化させられたのかを考察する。その中で18世紀から19世紀における公開処刑場が娯楽の場であったことを確認し、こうした娯楽としての場が失われつつある状況で人々は新たな娯楽の場を求めたがそれは階層分化をもたらすものとなってしまったこと、そこからひとまずは公開処刑の場が万人に対して開かれた娯楽の場であったことを確認する。そして娯楽の階層分化以後、公開処刑の際不可欠であったブロードサイドの盛衰をヒントに、こうしたメディアの興隆が19世紀後半の公教育制度を前に労働者階級の学校教育と日常の一こまをつなげる役割を果たし、その後の公教育をスムーズにして彼らの識字能力を向上させる一端を既に担っていたことを確認する。このことは、公開処刑の場が水面下で人々に対して担っていた教育的効果を明らかにし、従来の公開処刑の位置付けを覆すと同時に労働者階級の人々の識字率が学校教育とは離れた場で既に高かった理由を提示するものである。

尚、本稿においては「中・上流階級」以外の人々の意で「労働者階級」の語を、「国家」「当局」に対する意で全階層を含めた「人々」の語を用いることにする。また

「識字率」に関しては時代の特性上、「読み」能力に限定し「書き」能力は考慮しないことにする。さらに「イングランド」はロンドンを中心とする一地域を、「イギリス」は連邦国を指すことにする。

2. 公開処刑の変遷と娯楽の変化

A 公開処刑の質的変遷

イングランド最大の公開処刑場はロンドンにあるタイバーン処刑場であり、1196年に最初の処刑が行われたとされている⁶⁾。この時点から死刑は集落ごとに行われていた慣習的復讐ではなく都市国家による刑事司法制度の一環となった。主な処刑者は国家に対する反逆といった政治的・宗教的犯罪者であり、彼らに対し処刑前に絞首台上で演説を行わせるようになったのは16世紀初めである。この絞首台上での演説は犯罪者自身による罪の告白と懺悔であり、これを行うことで救済されると信じられた。見物にくる人々も静まり返ってこの最期の演説に聞き入っていたという。こうして公開処刑は「改悛の舞台」として祭儀的役割を付与された。この演説の内容と形式はやがてステレオタイプ化され、あらかじめ教誨師によって準備されるようになった⁷⁾。また次第に国事犯のみならず一般の重罪犯にも適用されるようになり、17世紀の演劇的想像力が支配したシェイクスピアの時代に形式上の完成を見るようになるのである⁸⁾。

続く18・19世紀の公開処刑をフーコーは「見せしめということを狙った」「処罰の儀式における結果」という表現を用い、その見せしめ効果と儀礼的性格を指摘している。すなわち、国家権力による身体刑を公開にすることで、一つは人々に恐怖心を植え付け国家の権力を誇示できたこと、今ひとつは見物客である人々に保証人としての役割を負わせ国家の示威的身体刑の責任を負わせる装置にできたことという二つの性質である。確かにフーコーは「身体刑の儀式では中心人物は民衆なのである」と言っているものの、続いて「現実に直接に彼らが現場に居合わせる事が儀式の仕上げにとって要請される」と自ら指摘しているように、ここで中心人物とされている「民衆」はあくまで国家の都合により要請された人々のことであり、国家的見地に立った公開処刑の性質であることは否めない⁹⁾。

実際18世紀に入ると絞首台での演説は次第にさなくなる。死を前にした言葉が形式化したこともあり、犯罪者が何を言うかではなく死を前にしていかにか振舞うかに人々の関心が移っていった。絞首台を前にした

犯罪者は、最後まで無実を主張し恨み辛みを吐きながら大暴れる者、恐ろしさから失神してしまう者、堂々と立派に振舞い潔く死んでいく者など様々であったが、その態度が立派であればあるほど観衆は喝采を浴びせ満足し、そうでなければブーイングの嵐となった。つまり公開処刑は改悛の舞台から犯罪者が死へ立ち向かう勇気を誇示する舞台へと変質していったのである¹⁰⁾。言い換えれば、かつての荘厳な宗教儀礼的性格が失われ、世俗化した国家による政治的儀式になってしまった。それ故、依然国家行事でありながらも華やかなショー的要素を持つものになったのである。

こうして18世紀における公開処刑は、例えばタイバーン処刑場においては年に八回行われたが、国民の公休日であり縁日に行われる出し物として「タイバーン・フェア」と呼ばれるようになった。タイバーン処刑場のみならずニューゲイト監獄から処刑場に向かう沿道にまで人々は場所取りをし、また処刑台がよく見える部屋には法外な店賃が支払われた。こうした場所取りは処刑前夜から始められ、一晩中パーティが繰り広げられた。そして犯罪者が通ると喝采や罵声、飲み物、食べ物などありとあらゆるものが飛び交い、交通規制も群集整理もできない状態となり、この日ばかりは階級差なくロンドンあげてのお祭り騒ぎといった様相であった¹¹⁾。

ここでは公開処刑が国家行事であることは半ば忘れられ、人々にとっては娯楽の一つとなってしまうのが現状であろう。オールティックは続く19世紀ヴィクトリア朝の場合、「殺人はなんといってもまず第一に、大衆娯楽だったのだ」と断定している¹²⁾。

B 娯楽の場の変化と分化

以上のように人々の娯楽であった公開処刑は、しかしながら18世紀末に規模が大幅に縮小されたことから、ある変化をもたらした。1783年にニューゲイト監獄が再建されたのに伴い、公開処刑は監獄前の広場で行われることになり、タイバーン処刑場は600年に及ぶ歴史を閉じた。これにより監獄から処刑場に至るまでのいわゆる「見せしめ街道」がなくなったため見物人の数も相対的に減り、かつての大規模なお祭り騒ぎの様相は幾分和らいだと想像される。また既に公開処刑の抑止力に対する疑問が有識者らには起こり始めていた。実際この頃の刑種言い渡し比率は死刑15.9%、流刑43.9%、拘禁刑28.3%であり¹³⁾、恩赦があったことなども考え合わせれば、犯罪者のほとんどが死刑というわけではなかったことがわかる。しかもこの時期最大

の刑種であった流刑に関して、アメリカの独立により流刑先が一時的に確保できず、拘禁刑遂行の場としての懲治監獄が整備され始めていた¹⁴⁾。先の処刑場移転に伴い公開での鞭打ち刑が非公開となったことも加え、刑罰の秘密化が徐々に進められた。換言すれば、人々に見える形での刑罰遂行の場が大幅に減少したと言えよう。

時期同じくして、演劇や操り人形芝居、そして蠟人形展示が流行するようになった。これらは殺人事件や犯罪者を題材にしたものであったことに着目すると、公開処刑の代替物としての役割を果たしていたとも言える。しかし有料であったため階級差無く公開処刑を見物していた全ての人々を取り込んだとは言いがたいだろう。一方、公開処刑に替わる無料の見世物と言えば死体見学である。医学的知識の発展のために、1752年絞首刑に処せられた死体の医師による解剖が規則づけられた。これ以来、解剖前の死体を人々に公開するという慣例ができ、大学の解剖学教室や市庁舎の判事室に一日で数万人単位の見物客が死体見学に集まったという。しかし1832年に解剖を規則づけた法律が撤廃されたのに伴い、この慣例も廃止されてしまった¹⁵⁾。

無料でしかも廃止されることなく続いた娯楽として挙げられるのが裁判の傍聴である。18世紀後半になり人々の関心は死刑といった処罰の結果だけではなく、処罰に至るまでの過程に興味を持つようになった¹⁶⁾。先の医学の興隆とも相俟って、病気の観念から犯罪者の精神性・人間性に着目した審議が行われるようになり、情状酌量の観念も生まれた¹⁷⁾。このような事情から結果のみを見届ける公開処刑ではなく、その過程を見守る法廷での傍聴が流行ったのである。ニューゲイト監獄に隣接するオールド・ベイリー(中央刑事裁判所)の外には、事件が報道されるたびに裁判の様子を一目見ようと長蛇の列ができた¹⁸⁾。しかしこの娯楽は無料ではあったものの労働者階級用の座席は少なく、選ばれた者だけが入れるということが多かったという¹⁹⁾。また非常に有名な事件の場合、裁判の何週間も前から古いホールに職人が入って棧敷を作り、一般大衆用に4000枚の切符が発行されたが、手から手に渡り裁判当日までに一枚六ギニー²⁰⁾になってしまったため、結局傍聴席は中・上流階級のサロンと化した。法廷では昼休みにシャンパンを飲み、つまらなくなると『パンチ』をめくりながらの傍聴である²¹⁾。しかも何故か貴婦人が多く、金襴・「ダイヤモンド・レースなどで飾り立て、髪型は一人の例外もなく髪にリボンを結んで上に様々な飾りのついた平らな帽子をのせていた²²⁾」

という豪華絢爛ぶりであった。

公開処刑の規模縮小に伴いそれに替わる娯楽として裁判の傍聴は大流行し、人々は娯楽の場を処刑場から裁判所の傍聴席へと移した。しかしまた結局のところ、それが取り込んだのは中・上流階級の人々だけであった。このことから逆に、公開処刑の場が貴賤問わず様々な人を対象に無料で開かれていた娯楽の場であったことが確認できる。その場が規模縮小されたことにより、結果的に娯楽の階層分化が進んだ。

では処刑場から傍聴席へと娯楽の場を移した中・上流階級に対し、労働者階級はどこに娯楽の代替を見つけたのであろうか。

3. 労働者階級の読み物が有する教育的意義

A 公開処刑時のブロードサイド

では労働者階級はどこに公開処刑の代替を求めたのか。答えは読み物である。

もともと公開処刑を観に来た人々は、これから処刑される犯罪者の詳細な情報を知りたがった。はじめこれらは口コミで広まっていったが、やがて16、17世紀になると印刷技術の普及により廉価なブロードサイドとして呼び売り商人によって売られるようになる。そこには犯罪者の名前、年齢、身分、生育歴、学校歴、罪状、言い渡された刑罰、最期の言葉などが書かれていた。先にも記したとおり16、17世紀には犯罪者が絞首台上で演説した最期の言葉を観衆が直接聞いたのだが、18世紀には次第に実行されなくなったため、こうしたブロードサイドがそれに代わるものとして重要な役割を担い始めたのである²³⁾。ところが処刑直後に配られるこれらのブロードサイドには犯罪者の絞首台での最期の言葉も既に印刷されており、その信憑性は甚だ疑わしいと言わざるを得ない。もともと書き手は、秘密厳守で犯罪者の最期の懺悔を獄中で聞くはずの教誨師や印刷屋と契約をした雇われ三文文士であった。彼らは自分たちの生活の為、真実を書くことよりも読者に喜ばれる文章を書くことを優先させたとも言える。いずれにせよ、例え虚偽の内容であっても公開処刑を盛り上げる小道具の一つとして機能した。

ブロードサイドの形態は大判紙やパンフレット式の小冊子であり、一部1ペニー²⁴⁾で売られるなど手軽で廉価なことが特徴である。人目を引くために「世にも恐ろしい」といった大げさな見出しと木版画が必ずついていた。この木版画は粗雑なもので、多くは殺人の場面か絞首台に吊るされている場面であったが、同じ

ものを何度も繰り返して使ったもので、どの事件であってもほとんどが同じ挿絵であった。またある似顔絵が犯人のものとして刷られることもあれば、死刑執行人として刷られることもあった。当時のブロードサイドを見る限り、速報性は重視しつつも真実を伝えるというジャーナリズム精神はまだ育っていなかったと言えよう。しかし処刑時のブロードサイドは貴賤問わず多くの見物客に売れ、印刷屋や商人にとっては書入れ時であった。また人々に受け入れられる内容を意識して書かれたものであるため、幼い子どもが処刑されるときは同情を誘う文章にしてあり、何不自由ない金持ちの犯罪者であれば驚嘆を隠せない書き方にされた²⁵⁾。逆に人々は、犯罪者に関する記述を通して教育や犯罪や人間に関する社会通念を無意識のうちに摂取していたとも言える。

B チャップブックの浸透

いずれにしろこうした速報ニュース性の高いブロードサイドは公開処刑の見物客にとって必要不可欠なものであったが、犯罪ニュースに限らず社会風刺や災害、珍しい出来事といった内容もあり公開処刑時以外にも売られていた。そして同じく日常よく売られていたものとしてチャップブックの名で知られる簡易本がある。大きさは文庫本ほどで12頁から24頁くらいの、本というよりはパンフレット形式のもので、必ず挿絵があり、質量とも大判紙のブロードサイドと区別し難い。こうしたチャップブックは、都会では雑貨商が店の一角に置いているか、地方ではチャップマンと呼ばれる行商人によって販売された。彼らは中世から少なくとも18世紀末まで、都市から離れた村落や農村の各一軒一軒を訪問し衣類、文具、化粧品などの日用品や小間物類を売り歩いた。17世紀まではそれらにブロードサイドが加わり一緒に運ばれた。しかしブロードサイドは大判紙であるため持ち運びに不便であり破損することが多かったため、より小さなチャップブックに取って代わられるようになった。こうして17世紀末からチャップブックが重要な売り物の一つになり、通常一冊1ペニーの安価で販売された²⁶⁾。しかし金銭的に余裕のない農夫らが例え1ペニーであってもわざわざ教養費にあてることはめったになかったため、品物を多く買ってくれた家には上得意客へのサービスとしてチャップブックを一冊進呈することもあった。それをきっかけに読むようになった人々がチャップマンの次の訪問時に新たなチャップブックを注文するようになり、この廉価本は徐々に浸透していった。地方の村に生まれ育

ち一生村から出ない人々にとってチャップマンは、生活に必要な日用品だけでなく都会や外の世界の情報をもたらしてくれる貴重な存在であった²⁷⁾。

しかし田舎を回る行商だけではやはり生活が苦しく、彼らは他に二種類の方法で稼いでいた。一つは、追剥ぎである。チャップマンはロンドンなどの都会で商品を仕入れ、整備されていない街道を歩いて地方の村々へ行商に行かねばならなかった。当時街道は裕福な人たちが旅行のために馬車などで通ることも多かったが、同時に身包み剥がされる危険極まりない場所でもあった。チャップマンも様々な商売品を担いでいたため狙われてもおかしくないはずだが、他ならぬ彼らが追剥ぎ業を兼任していた可能性が高い²⁸⁾。事実エリザベス一世時代には、こうした行商人は一種の浮浪者と考えられ、詐欺師、鋳掛師とともに取り締まりの対象になっていた²⁹⁾。しかし依然、彼らが都会から隔絶された人々にとって唯一もたらされる情報源であったことには変わりない。

もう一つは、フェアでの販売である。長時間かけて小さな村々の一軒一軒を訪問販売するのは効率が悪い。そこで人が大勢集まるフェア時にその日のために多くの品物を仕入れて出かけていき、稼ぐのである。そのためにフェアの開催日と開催場所が記してあるチャップマンのためのガイドブックまで出された³⁰⁾。タイバーン処刑場に代表される公開処刑時の呼び売り商人とは他ならぬこのチャップマンたちだったのである。

さて、実際にチャップブックはいかなる内容であったのだろうか。ニューブルグは以下の23種類に分類している³¹⁾。すなわち宗教/道徳、物知り事典、家事の手引き、歴史/政治/伝記、地誌/地方史、旅行記/冒険譚、奇人/奇妙な出来事、散文物語、伝説ロマンス/妖精物語/詩の民間伝承、劇、韻文物語、歌、滑稽本/ユーモア/なぞかけ、詩による滑稽話、オカルト(a. 夢, b. 占い, c. 手品)、悪魔学/魔術、予言、犯罪と犯罪者：総合、犯罪と犯罪者：裁判、犯罪と犯罪者：処刑、犯罪と犯罪者：警告書、犯罪と犯罪者：個々の犯罪と犯罪者によって告訴された人、その他(a. 社会風刺, b. 結婚生活, c. 礼儀作法と習慣, d. 格言, e. 暦)である。一見してわかるのが23種類の分類の内、犯罪と犯罪者のカテゴリーが5つも占めていることである。ブロードサイドはもちろんのこと、チャップブックもその材質上後世まで残っているものは少ない。一部を何人もの人が回し読みしているうちに破損してしまうことも多かった。そのため一年の間に全体でどのくらいの出版量があったのかは不明であるが、

人々を惹きつけていたのはやはり犯罪物であったことがこの分類からはうかがえる。こうしたブロードサイドやチャップブックの犯罪情報は18世紀初頭から徐々に本としてまとめられるようになり、幾種類も出され、総称して『ニューゲイト・カレンダー³²⁾』と呼ばれている。一度に多くの犯罪もののチャップブックが読めるのであるが、限定私家版で労働者階級が買えるものではなかったため、やはり彼らは廉価版であるブロードサイド等を手にしていたものと思われる。

C 犯罪ニュースとニューゲイト・ノヴェルの誕生
ところが19世紀に入り、これらのブロードサイドやチャップブックは次第に廃れていく。19世紀初頭の印刷術の発達によって新聞や雑誌そして書物の大量生産が可能になり安価になった。また18世紀末に公開処刑の規模が縮小され稼ごどころが減ったこと、1830年以降は鉄道の発達によって街道が整備され大量輸送が可能になったことから、チャップマンの活躍の場がなくなっていった。これらの事情からチャップブックに代わるものとして、新聞・雑誌が急成長し、労働者階級を対象とした大衆娯楽としては犯罪ニュースも多く扱った絵入りの日曜新聞が隆盛を極めるようになった³³⁾。先に中・上流階級が公開処刑に代わる娯楽として裁判の傍聴にその場を移し、それは犯罪の結果のみならず刑罰に至るまでの過程にも人々の知のまなごしが向けられたことによることを指摘したが、ジャーナリズムの世界においても19世紀以降、公開処刑時に配布されたブロードサイドにみられたような犯罪の結末報道から犯罪の発生時点における原因究明報道へとその重点を移していくようになった³⁴⁾。これは正に時代の要請として犯罪の抑止ではなく予防に目が向けられるようになったことと連動すると言えよう。

ブロードサイドやチャップブックに代わるものとしてこうした実録の犯罪ニュースがその性質を変えて報道されるようになる一方で、実録であることをやめ次第に虚構ものとして流行するようになる本があった。これが特に1830年代から40年代にかけて多く出版された「ニューゲイト・ノヴェル³⁵⁾」と呼ばれる小説群である。ニューゲイト・ノヴェルは概して犯罪者を美化・英雄化し同情的な態度を示しているのが特徴であり、支配階級からは人々の教化に向かないとして多くの批判も受けたが、実際に犯罪増加の原因になったとは言えない³⁶⁾。むしろ頻繁に凶悪な事件が起こるわけではなかったために瓦版形態の印刷メディアは徐々に飽きられつつあり、想像力豊かに書かれた小説の方が労働者階

級に多く読まれるようになったのである。

D 分冊本の出現とコーヒーハウス

こうした小説が流行したのはその内容のお陰だけではなかった。労働者階級に限らず全階層に支持されるようになったのは、出版様式と販売様式が人々のニーズに合ったからである。まず出版様式は一冊本の他、多巻本、三巻本、分冊本、雑誌連載がある。一冊では高価になりなかなか手に入れにくい本も、分冊形式であれば一度の単価は安くなり手に入れやすい。ディケンズの小説は19ヶ月に渡って一小説分を1ポンドで買えた。また三巻本はヴィクトリア朝の典型であったが、これは一度に購入しなければならない上30ポンドと割高であった。しかし17世紀半ばには出現し18世紀後半に急成長したコーヒーハウスが好んで購入した。何故なら一巻本に比べ三倍の料金をとることができたからである。こうして三巻本は19世紀に最もよく出された出版様式となった³⁷⁾。

コーヒーハウスは18世紀初期にはロンドンだけで2000軒を数え、コーヒーよりもむしろそこに置かれていた新聞や雑誌に人気があった。18世紀前半から貸本も始まり、大体1シリングの年会費制も導入された。しかしいくら高価な本が読めるとは言え、1シリングは1ペニーの12倍もの価値があり、18世紀中隆盛を極めたコーヒーハウスは中・上流階級の男性に限られた娯楽と社交の場であった。中・上流階級の女性を取り込んだのが18世紀前半に出現した貸本屋であり、コーヒーハウスにヒントを得てやはり年会費制であった。18世紀の貸本屋はロンドンで26軒、イギリス中では1000軒ほどあったという。コーヒーハウスよりはだいぶ小規模ながら19世紀にかけて三巻本のお陰でかなり繁栄した³⁸⁾。

では労働者階級は本を読んでいたのだろうか。19世紀前半に彼らを対象とした非会員制の貸本屋ができた。一日一冊通常1、2ペンスで借りられ、多くは各種の小売商店が収入を補うための兼業でするものであった。最もこの頃になると三巻本や分冊本を一巻にした廉価復刻本がだされるようになり、また一冊1ペニーの毎週分冊で販売されることもあった³⁹⁾。しかしコーヒーの輸入税が軽減されたことからコーヒー代が安くなり、一時は衰退の兆しを見せていたコーヒーハウスが再び19世紀には増大し、ロンドンでは毎年100軒ずつできていたという。19世紀のコーヒーハウスは18世紀とは違いコーヒー一杯1ペニーで飲める上に本が読めるとあって、利用者のほとんどが労働者階級であった⁴⁰⁾。

1849年にロンドンに2000軒ものコーヒーハウスがあり、その内四分の一は貸本もしていたという。2000冊もの蔵書を持つところもあり、労働者階級にとっては学校でも図書館でもある教育施設であったのである⁴¹⁾。

実はこのコーヒーハウスこそが公開処刑に替わる娯楽の場を労働者階級に提供していたと言える。次に見る学校や宗教施設も労働者階級にふさわしいとする読み物を提供したが、宗教的・教訓的なものが多かった。必要最小限の教育しか受けていない人々は娯楽として楽しめる読み物を欲し、彼らのこうしたニーズに応えたのが小説を売り出した出版業界であり、読む手段を提供したコーヒーハウス(貸本屋)なのである。

E 労働者階級の識字率と教育

以上、公開処刑時におけるブロードサイドから始まり、犯罪に関する印刷メディアの変遷を概観し、公開処刑に代わる労働者階級の娯楽が読み物であったことを確認してきた。しかしここで果たして彼らが実際にどの程度読むことができたのか疑問が残る。そこで以下、労働者階級の教育とこれらの印刷メディアの関わりについて検討していきたい。

18世紀の間、イングランド・ウェールズの人口は550万から890万にまで増大したと言われており、この増大は主に労働者階級によるものと言われている⁴²⁾。そして1870年の教育法を待たずして労働者階級の識字率が18世紀末の時点で既にかなり高かったことも知られている。1840年の時点で読み能力は大人人口の75%、書き能力は60%に達していたとされ⁴³⁾、1841年には男子が67.3%、女子が51.1%の識字率が1871年までに男子が80.6%、女子が73.2%にまで達していたとも言われている⁴⁴⁾。公教育制度の成立を待たずして何故このようなことが可能であったかについては、18世紀におけるチャリティ・スクールやデイル・スクールの存在が知られているし、それに続く18世紀末の日曜学校の存在は大きいとされている。また1840年までにイングランド・ウェールズにおけるほとんどの人々が何らかの形で学校経験をしている⁴⁵⁾。こうした学校における最重要のカリキュラムはまず読みの習得であった。特にハンナ・モアは日曜学校だけでなく、宗教冊子協会も作り、新たに字を覚えた貧困児童のために読み物を提供した。日曜学校が識字力獲得手段を提供し、協会が識字力利用手段を提供した⁴⁶⁾。確かに労働者階級の道徳的向上のために印刷文字を利用するという博愛主義者や宗教家らの基本的立場は16世紀から既にあり、教育的動機から読み物を作ることは新しい教育方法で

は決してなかった。しかしこうしたモアの大衆教育における功績は大きく、18世紀において既に多くの児童が読むことを教えられていたのは事実であろう。冊子は児童の教育を目標に宗教的・道徳的教訓的文章であり、反道徳的で低俗な巷に溢れる民衆本の代わりになることが意図されたものであった。さらに子どものみならず読み書きの充分でない大人にも役立つよう、平易に書かれていた。

しかしここで言う「反道徳的で低俗な巷に溢れる民衆本」とはチャップブックのことであるが、モアが出した冊子もまたチャップブックそのものであった⁴⁷⁾。宗教冊子協会の冊子は中流階級の慈善家らが協会の会員になり、労働者階級にふさわしいと思われる文章を書いて出版するという形態であったが、こうした宗教冊子は当の労働者階級によって必ずしも歓迎されなかった⁴⁸⁾。むしろもともとチャップブックとして出された冊子が、地理や歴史の基礎知識、宗教や道徳を教えるための教材としてチャリティ・スクールで利用されるということがあったほどである⁴⁹⁾。チャップブック史においてモアが初めて教育を目的とした冊子を作ったことは重要であるが、「反道徳的で低俗な巷に溢れる民衆本」こそがこうした公教育前の種々の学校において教科書的な役割まで果たしていたことはより注目に値する。

18世紀に人々の日常生活に読み物に限らない大量の印刷物が入り込むようになった。例えば切符、ビラ、広告、カタログ、ポスターなどである。こうした事態は、文字が読めないことが社会的に恥である概念を生み出し、そもそも基本的に経済生活上の不利を招くことになったのである⁵⁰⁾。宗教的・道徳的観念を持たせることは中流階級以上の人々の労働者階級に対する願いであったのだろうが、当の労働者階級は実は半ば状況に迫られて識字力を身につけていたと言える。

そして生活のための識字力向上に加え、人々の読み能力を実践的に向上させていたのは、教育的配慮から作られた冊子ではなく、知的好奇心から手にする読み物であった。これこそが18世紀まで人々の娯楽の場である公開処刑で配られたブロードサイドをはじめとした一連の読み物であり、後にコーヒーハウスで人気を博す小説本であった。オールティックは「何百万という文盲、半文盲の大衆は殺人に見せられ、そこから、新聞・雑誌を読むのに必要な程度の活字を読む力をマスターすることになった。これは当時の正式な初等教育の場でさえなかなか達成できない目標だった」としている⁵¹⁾。19世紀初頭の出版業界は経営のために、セ

ンセーショナルな「犯罪ニュース」を刷り識字力の大衆化に拍車をかけた。日曜学校運動の推進家たちとは違い動機こそ不純であるが、事実、労働者階級が手にした識字力を維持する上で、新聞をはじめとした印刷メディアは重要な手段の一つとなった⁵²⁾。そして着目すべきは、こうした媒介物が識字力維持に貢献したというだけでなく、労働者階級にとっての娯楽と教育を同時に成り立たせたということである。学校で教科書的チャップブックを読まされる以前に、公開処刑の場や日常生活の娯楽の場で彼らは実践的に印刷メディアに触れ、知らず知らずのうちに識字能力を向上させていったのである。

奇しくも18世紀末の日曜学校運動と公開処刑の規模縮小は時期を同じくしているが、日曜学校が労働者階級を教育の現場に取り込めたのは、彼らが既に公開処刑などの場で好奇心を持って印刷メディアを手に入っていたからであった。「何のために文字を読むのか」という疑問に答えていたのはそれら一連の読み物であり、慈善家らによる教化運動用のそれではなかった。

しかしこのことは、労働者階級の道徳的教化が失敗したということではない。むしろ彼らの読んだブロードサイドやチャップブック、後にはニューゲイト・ノヴェルや犯罪ニュース新聞、雑誌には、政治的・社会的道徳的訴えかけが随所に散りばめられていた。つまり労働者階級の教化そのものが成り立たなかったのではなく、むしろ人道主義者らによる意図的なものは既存の娯楽メディアによってある程度先を越されていたということである。

4. おわりに一結論

公教育制度成立以前に宗教・慈善団体によって既に学校教育制度が存在し、特に18世紀後半に起こった日曜学校運動は産業革命下の労働者階級にとって画期的な教育機関となったこと、そしてこれらの既存慣習的学校制度を取り込む形で19世紀後半イギリスにおける公教育制度が成り立ち得たことは従来の研究から明らかである。ではしかし、労働者階級が実際に読む行為を何によって養っていたのか、あるいは何を読んでいたのかということを考えたとき、従来の見方は一面的でしかないだろう。

18世紀末から19世紀にかけて、文字を教えたのが学校であるならば、読む行為を広めたのはメディア産業の隆盛であった。しかし印刷メディアの大衆化が19世紀に推し進められたとはされるが、印刷メディア自体

は16, 17世紀から始まり, 18世紀にはブロードサイドやチャップブックの形で都会のみならず郊外や田舎にも浸透しており, 少なくとも読むことに関しての識字率は既に高かったのである。そして労働者階級の教化教育以外の場所でこれらのものが好んで読まれた理由は, 次の二点にある。すなわち第一に興味を惹くものであったこと, 第二に生活上必要であったこと。彼らは自分たちの好奇心や知の欲求を満たしてくれるものであるからこそ自ら実践して読む行為をしたのであり, 道徳教訓的なものはその対象とならなかった。言い換えれば労働者階級にとって読むことは教育的行為ではなく, あくまで娯楽の一つであったのである。

そしてコーヒーハウスの出現は, その娯楽体現の場を彼らに提供するという重要な役割を果たした。このような「娯楽体現の場」を翻ってみると, それこそが公開処刑場である。ここでは読み聞かせの形態も多かったものの, 重要な小道具の一つとしてブロードサイドが氾濫した。処刑を見世物として盛り上げたということのほかに, 視覚的に瞬時に終わる処刑と比べ物理的に残るものであったからこそ公開処刑の規模縮小に貢献し得たというメリットがある。また公開処刑場がコーヒーハウスと異なるのは, そこが無料で万人に開かれたものであり, 階層差なく人々の恐怖心と好奇心, 満足心を満たす場所になり得たということである。人々が交じり合う祭りとして唯一の場所であったとすれば, それは人間の感性に訴えかける性質・国家的役割を担わされた性質・宗教儀式いずれにせよ, 貴賤の別なく人間そのものに訴えかける貴重な場であったと言える。

最後に, 犯罪者の国家的制裁の場であるはずの公開処刑に見出された新たな性質をまとめてみたい。一つは, 労働者階級にとって読む行為が直接生活と結びつかない時代にあって, 既に公開処刑が読み物と読む行為の場を提供していたということである。ここでは人々の知的な好奇心こそが読む原動力となり, その後の印刷メディアの興隆を支える根本となった。この公開処刑の場こそが見物にきていた労働者階級の人々に教育実践の場を提供していたと言えるのである。公開処刑が規模縮小された後, 結局それに代わる労働者階級の娯楽の場がコーヒーハウスであったことでもそれは明らかである。

次に, 処刑場で配布されたブロードサイドはただ単に犯罪や犯罪者に関して面白おかしく書かれただけではないということである。確かに人々に向けセンセーショナルで恐怖心を煽るように書かれていることもあり, また販売時間(刑執行直後)の関係から事実が曖昧

なことも多く, 決して真実を報道するものではなかった。しかしこの虚構性にこそ書き手の思惑が大いに含まれるのであり, また読み手のそれも現れるのであった。例えば生育歴や教育歴は様々な形で詳細に記されることが多く, 少なくともブロードサイド上ではこの頃既に「教育と犯罪の相関関係」が自覚され, 「教育」の重要性が認識されていることが確認できるのである⁵³⁾。読み手側は無意識のうちにこうしたメッセージを受け取り, 蓄積してきたと言える。

公開処刑は娯楽でありながら人々に活字印刷を読ませる動機付けを与えた点で教育的な場であったと言える。多くの人々も文字が読めたという点で「無知」ではなかった。しかし次に何を読むかが問題となるのであり, 社会的規律や道徳的観念に関しては確かに労働者階級は未だ「無知」であったのかもしれない⁵⁴⁾。しかし犯罪者処罰に関して言えば, 文字による犯罪者制裁を享受できていたからこそ公開処刑の規模縮小も成し得たのであり, その後の近代刑罰制度を進めることにもなった。瞬間的刑罰を視覚的に楽しめずとも, 永続的に文字によって好奇心を満たす術を労働者階級は身につけていたのである。この術こそ, 公開処刑の場が彼らに与えたものであった。労働者階級の識字率向上が学校教育ではなく娯楽の延長であったために為されたこと, そしてその場を提供した公開処刑場の知られざる一面を提示できたことの意義は大きい。

(指導教官 汐見稔幸教授)

註

- 1) Peter Linebaugh, *The London hanged-crime and civil society in the eighteenth century*, London, 2003 村上直之『近代ジャーナリズムの誕生—イギリス犯罪報道の社会史から』岩波書店, 1995
- 2) ミッシェル・フーコー(田村俊訳)『監獄の誕生』新潮社, 1977, p. 59-61
- 3) 大田直子『イギリス教育行政制度成立史—パートナーシップ原理の誕生』東京大学出版会, 1992, p.91
- 4) W. B. Stephens, *Education, Literacy and Society, 1830-70 The geography of diversity in provincial England*, Manchester University Press, 1987, p.325-338 ちなみに登記書等による識字率研究はローレンス・ストーン(佐田玄治訳)『エリートの攻防』御茶ノ水書房, 1985に詳しい。
- 5) D. F. Mitch, *The Rise of Popular Literacy in Victorian England—The Influence of Private Choice and Public Policy*, University of Pennsylvania Press, 1992, p.135-156 p.200-212
- 6) Alan Brooke and David Brandon, *Tyburn London's Fatal Tree*, Sutton, 2004, p.6
- 7) 村上, 前掲書, p.53

- 8) J. A. Sharpe, 1985 "Last Dying Speeches: Religion, Ideology and Public Execution in Seventeenth-century England" *Past and Present*, No.107, May
- 9) 本段落カッコ内フーコーの引用は全て、フーコー、前掲書、p.60
- 10) 村上、前掲書、p.54
- 11) R. D. オールティック(村田靖子訳)『ヴィクトリア朝の緋色の研究』国書刊行会、1988、p.159
- 12) R. D. オールティック、前掲書、p.430
- 13) 三宅孝之『英国近代刑罰法制の確立【刑事施設と拘禁刑】』大学教育出版、2001、p.15
- 14) 同上、p.15-18
- 15) R. D. オールティック、前掲書、p.158-159
- 16) 詳細な論証は拙稿「18世紀イングランドの犯罪者把握における教育・人間観—『ニューゲイト・カレンダー』にみられる教育・処罰記述を手がかりに—」『日本の教育史学』教育史学会紀要第46集、2003、第2章第1節
- 17) 同じく詳細な論証は同上、第2章第2節
- 18) J. L. Rayner and G. T. Crook, *The Complete Newgate Calendar*, Linsen Book, 1983, p.320
- 19) R. D. オールティック、前掲書、p.155
- 20) Liza Picard, *Dr. Johnson's LONDON*(paperback ed), London, 2001によれば、1777年当時の熟練職人の週給の六倍ほどの価値。
- 21) R. D. オールティック前掲書、p.58
- 22) Liza Picard, *op. cit.*, p.285(田代泰子訳『18世紀ロンドンの私生活』東京書籍、2002、p.330)
- 23) 村上、前掲書、p.56
- 24) Liza Picard 前掲書によれば、酔っ払える量のジン相当の値段。
- 25) ブロードサイドの性質についての詳細は、拙稿修士論文「『ニューゲイト・カレンダー』における犯罪者言説と人間・教育観」東京大学大学院教育学研究科提出(2001)参照。
- 26) V. E. Neuburg, *Chapbooks*(2nd ed), Guildford and London, 1972, p.1 また同じく V. E. Neuburg, *Popular Education in Eighteenth Century England*, London, 1971, p.115によれば、チャップ(chap)の語源は定かでないが、古英語で商売を意味する 'ceap' が転じたという説や、単に安いを意味する 'cheap' からきているという説がある。あるいは行商人の意のチャップマンが商う本であることからチャップブックになったという説もある。
- 27) 小林章夫『チャップ・ブッカー—近代イギリスの大衆文化』駸々堂、1988、p.335-337
- 28) 同上、p.327-328
- 29) Neuburg, *op. cit.*(1971), p.115
- 30) Neuburg, *op. cit.*(1971), p.123
- 31) Neuburg, *op. cit.*(1972), p.6-7
- 32) J. L. Rayner and G. T. Crook による前掲書もその一つである。
- 33) 村上、前掲書、p.236によれば「ロイズ・ウィークリー・ニューズペーパー』『レノルズ・ウィークリー・ニューズペーパー』など。
- 34) 同上、p.233
- 35) 北條文緒『ニューゲイト・ノヴェル—ある犯罪小説群』研究者選書、1981に詳しい。
- 36) R. D. オールティック、前掲書、p.414
- 37) ジョン・フェザー(箕輪成男訳)『イギリス出版史』玉川大学出版部、1991、p.265-266(John Pliny Feather, *A History of British Publishing*, Croom Helm, 1988)
- 38) 清水一嘉「貸本屋と読者大衆」『英国文化の世紀4 民衆の文化誌』研究社出版、1996、p.72-84
- 39) ジョン・フェザー、前掲書、p.267-270
- 40) 清水、前掲論文、p.85-86
- 41) Thomas Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain from the middle ages to the twentieth century*, Liverpool, 1970, p.176
- 42) Richard D. Altick, *The English Common Reader - A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*(2nd ed), The Ohio State Univ., 1998, p.30
- 43) Thomas Kelly, *op. cit.*, p.147
- 44) Richard D. Altick, *op. cit.*, p.171
- 45) Thomas Kelly, *op. cit.*, p.147
- 46) ジョン・フェザー、前掲書、p.281
- 47) 小林、前掲書、p.300-302
- 48) ジョン・フェザー、前掲書、p.280-281
- 49) 小林、前掲書、p.341
- 50) ジョン・フェザー、前掲書、p.226
- 51) R. D. オールティック、前掲書、p.409
- 52) ジョン・フェザー、前掲書、p.283-284
- 53) 詳細は拙稿前掲修士論文、拙稿前掲教育史学会論文第1章参照のこと。
- 54) 村上、前掲書、p.184によれば、この時期を境に「無知」の意味は変容し、「教育がない」ことではなく「正しい知識がない」ことを意味するようになるという。